

でもどこでも、国家予算の4分の1は教育にかけて、若い人たちの教育に努力している。国の中枢を握っていたフランス人が引き上げた中で人材不足でもあった。だから大学を出た女性は即戦力として期待されたという事もあると思います。最初は、小学校までは義務化されたかなと思うくらい女子も行くのですが、中等教育になるとガタンと就学率が低くなっていました。

でも、それもいまは、むしろ中等教育では女子のほうが多いくらいになっています。大学でも、医学部などは半分以上女性といわれていて、チュニジアでは国家フェミニズムといわれた時代もありました。ただ、その国家フェミニズムは、一方でイスラーム主義者のナフダ党などを抑圧して、国外に党首が亡命したり、それから労働組合も強かったんですが、それも他の左翼と共に弾圧しという、それをかわす意味で女性を重用したところもあったのだらうと思います。でもそれだけじゃなくて、女性たちも頑張ったと思いますね。そういう意味で、今度の革命でも、女性が最初の段階から参加して、ジャスミン革命なんていわれていますけれども、私は使ったことはないのですが、チュニジア人は「あれはサボテン革命だ」と言っていますし。女性たちが、ガンヌーシーというナフダ党の党首がロンドンの亡命から帰ってくるその日にあわせてデモをチュニスの中心街で組織しました。一橋大の地中海研究会とチュニジアの CERES のジョイントセミナーでお会いしたり、今所属する科研のプロジェクト(「変革期のイスラーム社会における新たな課題と役割に関する調査・研究」代表塩尻和子)で招いたり、交流のあるムニーラ・ラマディ・シャプトー Mounira-Ramadi Chapoutot さんという、マムルーク研究をしているチュニス大学の名誉教授の方がいるのですが、彼女がデモで先頭に立ってチュニジア国旗を体に纏って拳を振り上げているところが、『シカゴ・トリビューン』の表紙になったというので、「あなた、そんなことして大丈夫?」と聞いたら、「私たちは、とにかく言論の自由が保障されたことが、革命の一番良いことだから大丈夫よ」と言っていたんです。でも、昨年日本に来たときには「すごく怖い」と言っていて。自分の知っているだけでも24、5人が、学部長とか、学長とか、そういうポストにある人たちが防弾チョッキを着ているというんです。ですから、状況は厳しいようです。例のバルドー博物館での襲撃で日本人も殺されてしまいましたし。チュニジアは観光立国だったのに。それでも、頑張っただけでエジプトみたいにならないように、なんとかやっついていこうとしている、ですから私はそこに光を見て応援したいと思っていますけれど。

(但し、2015年にチュニジアの4団体がノーベル平和賞を受賞して、16年7月に日本の笹川平和財団に招かれて講演会があったときに、「とにかく治安の維持には国民が努力しているから、日本の皆さんは是非観光に来てください。それによってチュニジアも勇気づけられる。」と話していました。確かに観光事業が、衰退して失業者が増え、不法難民などや、ISに参加する青年たちが増えたりしているのは、困ります。)

*****質疑応答*****

司会 宮治先生、どうもありがとうございました。文化人類学研究室が赤門のそばにあったなんてことは全然知りませんでしたし、ずっと駒場にあったものと思っていましたので。本当に広がりのあるお話を頂戴しまして、私は男性ですので、女性として、小さい子どもを育てながらということで、それを切り開いていらっしゃったというところが、とてもすごいなと思って感銘を受けてうかがいました。ありがとうございます。うちも若い女性研究者がたくさんいますので、今日はたぶんすごく励みになったと思います。本当にありがとうございました。20分少々ありますので、どなたでも、

なかなかない機会だと思いますので、皆さんからの質問を募りたいと思います。

質問者 A 先生が修士論文のときにサハラ以南のアフリカのことをおやりになったと聞いて結構驚きました。ずっと北アフリカをご研究されていたと思っていただけでも。この両地域をご研究されて得られたことをお伺いしたいと思います。

宮治 南の人たちは北が遠いという感覚があるみたいですが、北の人たちは、南がすごく近いという感覚があると思います。大体サハラ砂漠でつながっていますから。最初はアフリカ統一機構でしたけど、今はアフリカ連合の一員という意識がすごく強いですよ。だからチュニジアで JICA が人口教育プロジェクトを 10 年以上やって、最初の 5 年はチュニジアの人口家族計画公団の人口教育のためのビデオ制作室を造ったり、次の 5 年は紙媒体の宣伝用のものを作る設備を援助しているのですが、サハラ以南から何十名も研修生を受け入れています。つまりサハラ以南との関わりというのは意外にありますよね。でもサハラ以南の人たち、特に日本の研究者たちは北アフリカにあまり馴染みがないですね。でも、トランス・サハラ交易というのは昔からとても盛んで、チュニジアのハフス朝(1228-1574 年)の頃から首都チュニスにはほぼ今の形が出来上がったとされ、南からは金や奴隷を、北からはオリーブや干しイチジクとか、ナツメヤシの実、羊毛、綿、麻の布、皮革、穀物、サンゴ、後にはサフサリとかイフリキエンヌという絹織物や絨毯、馬具なども輸出するというサハラ砂漠を介した交易や地中海諸地域との交易が、今のチュニジアのメディナの発展を築いていったのです(18 世紀には、オスマン帝国各地に毎年 14 万ダースのシェシアと呼ばれる紅いトルコ帽を輸出していました、そして職人集団の中では、帽子を並み太の毛糸で編むところから、38 行程の作業を経て、フェルトさせて成型したトルコ帽を作る、シェシア職人が一番格が高かったのです)。

アフリカ大陸としての一体感という有機的つながりの強さは、今になって始まったことではないと考えることができます。現在でも研究の分野でも、日本アフリカ学会ではよく知られている CODESRIA (Council for the Development of the Social Science Research in Africa) という Senegal の首都 Dakar で大学の教員などの研究者を中心に作られた組織は、マグリブ諸国の研究者たちも参加して、ちょうど 1981 年にチュニスにいた時にアルジェリアに行き、カビリーの調査許可を待っていた時に、アルジェ大学の CREAD (Centre de Recherche Economique et Développement Appliqué) で開催されていたので出席したら、所長リヤバス氏(若い時からの友人で、1993 年 3 月に高等教育大臣として青年スポーツ大臣と共に、それから始まる長い内戦のトップを切って暗殺されてしまいました)、チュニス大のズガル教授にもお会いしました。その時の CODESRIA の会長は、スーダン人でした。それから、1968 年に初めてアルジェリアに行った時の夏にアフリカ文化祭が開かれ、南からも沢山の人がきていました。

2014 年にアルジェに行きました時に、CRAPH(昔の CRAPE 改名)人類学・先史学・歴史学研究所のスリマン・ハシ Slimane Hachi 所長にお会いした時に、2009 年の 6 月 30 日から 7 月 4 日まで、アルジェで開かれた、国際シンポジウム記録『アフリカの人類学』、2013 年という大変立派な本を頂きましたが、それは、Jomo KENYATA (1893-1978), Ahmadou HAMPATE BA (1900-1991), Mouloud Mammeri (1917-1989), Chief Anta DIOP (1923-1986) の 4 氏に、捧げられた本でした。参加者は勿論、アフリカ各国の人類学者たちで、序言をアルジェ大学で私が民族学を習ったユーセフ・ナシブ先生が書いておられます。また、最近南でもイスラームがどんどん広がっていますので、そういう点でのつながりもあります。

質問者B お話を拝聴させて頂きまして、女性差別のお話したとか、そういったことをお聴きしたんですけれども、逆に、フィールドだったりで、女性であることが強みになったというようなエピソードを頂ければと思うんですけれども。

宮治 やはり、フィールドで家族の調査ということになれば、それは女性の方が、男性よりはずっとやりやすいと思います。それでも、メディナの門の前に立つとやはり緊張して、門を叩くのがちょっと気が重くなることはありました。でもメディナではどこでも受け入れて頂いて、親切にして頂いて感謝しています。男性だと、一人で行くことはとても無理でしょう。必ずその家族の親族とか知り合いの男性と一緒にないと、中に入れてはもらえないと思います。でもパリでの調査では、パリのカスパといわれる地区で調査をするといったら、メルシエ先生は、あんな危ない所に女性一人で行くのはおやめなさいといわれました。でも家族を訪れるのですからと行きましたが、若かったですから、やはりかなり危ない思いも経験しました。ですから女性であることからくる制約ももちろんあります。

宮治 メディナの調査についてあまりお話する余裕はなかったのですが、メディナっ子とかアヤーン、ウカラ化現象などについてのご質問があったので、私の「メディナの人類学」(『現代の人類学2:都市人類学』131-167頁、現代のエスプリ別冊、至文堂、1984年)を少しご紹介したいと思います。その論文の「はじめに」でまず、メディナの調査を通して見えてきたのは、19世紀前半の植民地化直前の、アラブ・ムスリム都市の一つのモデルとしてのメディナの姿と植民地化以降の発展途上国の首都の一部としてのメディナの姿の両方であった。と書いています。

アラブ・ムスリム都市のモデルとしてのチュニス・メディナ—19世紀前半のメディナの社会構造 (132頁)

1) アラブ・ムスリム都市としてのメディナ

チュニス(トゥーニス)のメディナ al-Madīna は、7世紀末(698)に、アラブ人(アミール・ハッサン・ブン・アンノーマン・アルガッサリニ)によって建設された1300年の歴史をもつムスリム都市である。

アミールは、ビザンツの支配するカルタゴを陥落させて新しい都市センターの基地をチュニス湾の奥のトゥーニスに定め、コプト人の一千家族を徴用して、湖を横切る運河で海と結ばれた海軍工廠を作らせ、チュニスの南北の交点にチュニス最大、最古の大モスク、エッジートゥーナ Ez-Zitūna を建設した。9世紀の初めには、大モスクを中心に城塞と堀で防御された、安全な人口の多い街として知られ、14世紀のハフス朝期には、ほぼ現在の形を整えたとされる。チュニスの町が発展した理由は、イスラーム帝国のイフリキヤ州の州都として、或いはこの地を根拠地とする諸王朝の首都として、政治勢力と結びついた経済力にある。中世の北アフリカの国家の重要な財源は、洋の東西、南北を結ぶ、陸路・海路の遠隔地交易、ことに金のキャラバン交易にあった。東アラブ地域(マシュリク)や、イベリア半島のアンダルスとの文化交流も盛んで、ジートゥーナのモスクは、北アフリカにおけるマールク法学派の拠点であるとともに、付属のマドラサは、ジートゥーナ大学として知られ、学術の面でも一つの中心であった。近世に至るまで、マグリブにおけるチュニスの唯一のライバルは、モロッコのフェスだけといわれた。

町の人口も、8世紀には6500人、9世紀には9千人といわれるが、14世紀半ばには、メディナと

南北二つのルバート (12 世紀からできた城郭外地区) 合わせて、3 万 5 千人の人口と推定されている。

住民の民族構成も多種多様で、先住民族たる、ベルベル人、古代ローマのアフリカ人、アラブの征服後入った東の諸民族 (アラブ人、シリア人、コプト人、ベルシャ人、メソポタミア人)、戦争や略奪で連れてこられたシリア人やスラブ人の解放奴隷、下働きや家僕として雇われていた黒人奴隷、他にもイスラームに改修したヨーロッパ人やユダヤ人などがいた。こうした基礎の上に、様々な民族集団が入れかわり立ちかわりやってきたが、ムワッヒド朝やムラービト朝の支配層は、モロッコのアトラスのマスムーダ語系のケタマ系のベルベル部族出身であったし、オスマン帝国時代には、もちろんトルコ人が支配者であった。もう一つの大きな移住の波としては、13 世紀から 17 世紀まで続いた、スペインを追われたアンダルス人たちの移住の波がある。ナスル朝の陥落 (1492 年)、とくに 17 世紀初頭、スペインが最終的にモリスコの追放をきめてから 4 万人以上がチュニジアに上陸したといわれる。彼らはハフス朝以来、トルコ時代もその学識や行政の知識をもって要職に登用されたり、手工業、建築、農業などの面でも新しい技術をもたらしたり、音楽、文学、衣服、料理その他、チュニスの都市文化に与えた影響は大きい



大モスクの写真

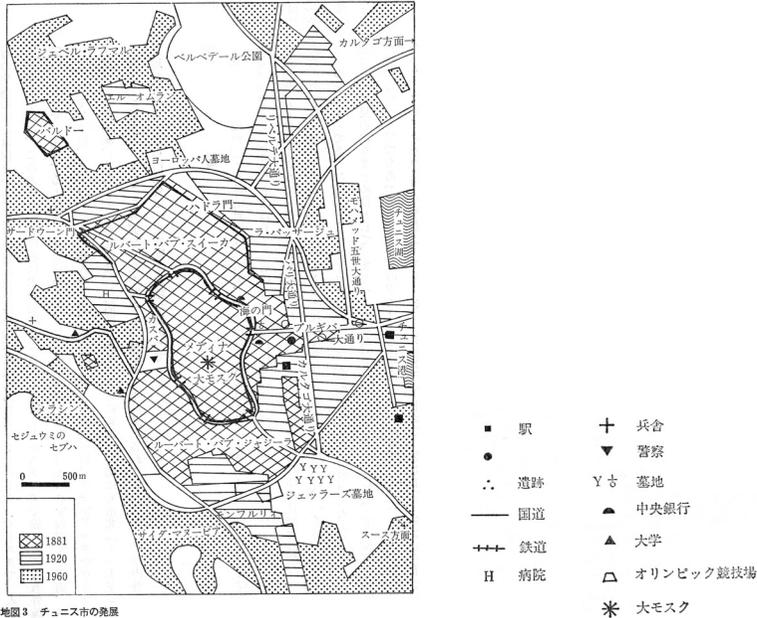
近世には、町のチュニス湾側の海の門 Bab al-Bahr の外に、ヨーロッパ人の船主や貿易商たちがいたが、彼らはフォンドウック (商人宿) に滞在し、出身の町ごとに纏まって平和通商条約に守られ、代表は領事として出身の町から任命されていた。

16 世紀の初め、レオン・アフリカンの情報では、メディナには 1 万の家が、南のルバートには 300、北のルバートには 1 千、東の海の門の外には 300 で、合計 1 万 1 千 600 で、合計約 5 万 8 千人の人口と指定される。1881 年フランスの保護領となった時には両ルバートを入れて約 12 万、現在では 15 万人位である。

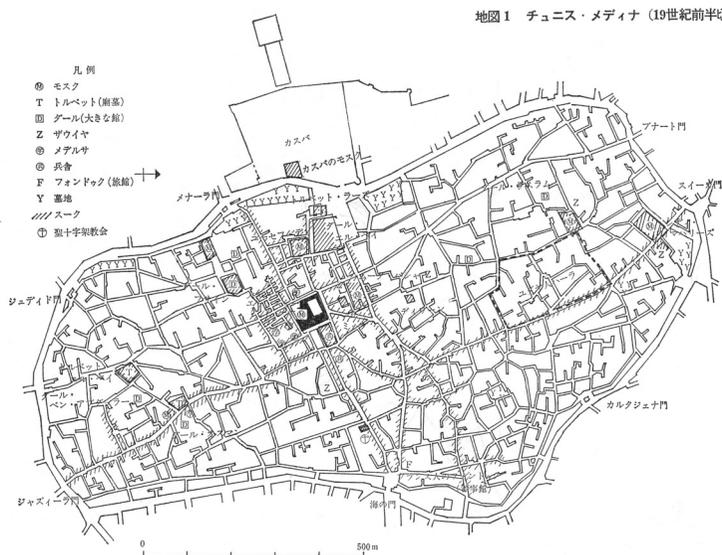
2) 町の形態学的特徴

町の形態学的特徴は、チュニス湖とセブハ (塩湖) の間に挟まれた長い土地のほぼ中央のやや小高くなったところに政治の中枢のカスバを背にして、南北に細長い形でメディナが位置する。街の生活の中心は町の東西と南北を結ぶ位置にある大モスクで、人々の生活空間はこの大モスクを中心

に求心的に構成されている。大モスクのすぐわきに高等教育施設のマドラサ、礼拝する人々が身を清めるミダン、狭い広場を挟んで、モスクを取り巻く商店街スーク、コーヒー屋、メディナに来た商人や学者、修道師などのための旅館フォンドックやウカラ、手工業者の作業場、そしてその南北には居住区があり、さらに城郭の外側にも南北にルバート(郭外地区)があり、またその外側を14の門を持つ城壁が二重に廻らされていた。城壁の内外には墓地が、そして郊外には果樹園や耕作地が広がっていた。



地図3 チュニス市の発展



地図1 チュニス・メディナ (19世紀前半頃)

3) 町の政治・行政組織

国家は16世紀以来のベイ(オスマン帝国の総督)と上級将校からなるディワーン Diwân と呼ばれる政府が行っていた。

メディナと2つのルバートの有力者から選ばれ、ベイから承認された3人のシェイフ(長)が町民の代表であり、ベイに収める税や貢納物の徴収役。特にメディナのシェイフは格が高く、町民の意見をとりまとめ、ベイの意向を町民に伝えるパイブ役であった。その下に各街区フーマの長、ムハレックがいて補佐。また各職業集団ごとのシェイフもいた。

4) 町民の経済的基盤と経済組織

町民の経済的基盤は土地所有も含めた農業、商業、手工業、特に遠隔地交易は富の源泉(絹、羊毛、綿、麻の布地類、シェシア帽、絨毯、武器、馬具、ナツメヤシの実、オリーブ油、穀物、塩漬けの魚、サンゴなどを輸出し、葡萄酒、ガラス細工、木材、貴金属、金物、宝石などを輸入)。

スークには、ヒエラルヒー。金属商、シェシア帽商、トルコ服商、織物商、蠟燭屋、香水・香辛料商、本屋、製本屋、履物屋、雑貨商、箆屋、鍋釜・金物屋、鍛冶屋、馬具屋、染物屋、城郭外には、陶工やござ職人の作業所、スーク(魚、肉、野菜、果物、蜂蜜、塩、炭、石鹼などを売る)があり、遊牧民も革製品や乳製品、ナツメヤシの実などを持ち込み、武器、布類、馬具などと交換。

5) 三つの社会階層 (図参照)

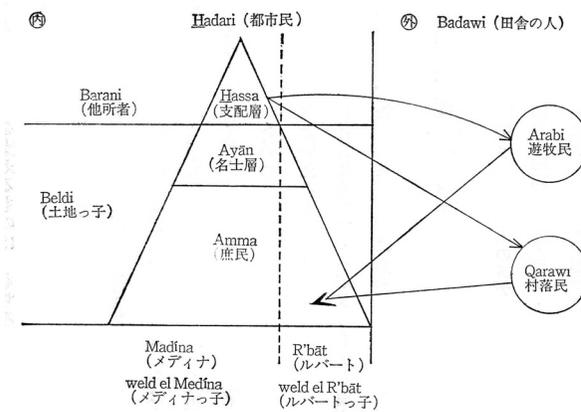


図2 メディナの内と外——連帯意識の構造——

アル・ハッサ：政治権力を持つ支配層、ベイを頂点とするトルコ人軍人集団と高級官僚

アル・アヤーン：名士層、ウラマーと呼ばれる宗教的エリート(法学者、神学者、裁判官、説教師、教師、学者など)、大土地所有者、富裕な商人や職人

アル・アンマ：一般庶民、零細な職人・商人、行商人、職人見習い、人夫召使、農民など、都市の雑業層が大部分

社会階層の空間的配置を見ると、外来の支配層は初めはカスバに集住していたが、政権が安定し、支配層が土着化するに従って、次第にメディナの中にも宮殿を建てて住むようになる。18世紀のフサイン朝ベイは、郊外のバルドーの宮殿に通常は住む。

居住区との関係でみると、カスバや大モスクに近い西側が山の手で金持ちが多く、海側が下町で

庶民が多いという大まかな区別はあったが、階層別の隔離は見られず、富める者も貧しい者も、壁を突き合わせて混住しているのがむしろメディナの特徴であった。

そうした混住が、彼らの間の都市民(ハダリ)としての連帯意識を育てたのであろう。

6) 生活の場としてのフーマ

メディナはいくつかの街区、フーマ(19世紀には9つ)に分かれる。これらのフーマは、東アラブのカイロやダマスカスのハーラほど壁で囲まれたり、夜は門をとじたりという閉鎖的なものではなかったようだが、それでも各フーマには、モスク、ハンマーム(風呂屋)、小スーク、コーヒー屋、パン焼き竈、クッターブ(寺子屋式コーラン学校)、ザーウィヤ(聖者の墓と聖者をめぐるスーフィー教団)があり、何世代も前から代々住みつく家族も多く、住民同士がよく知り合い、日常生活の精神的物質的必要を一応この中で満たせる一つのマイクロコスモスをなしていた。近隣コミュニティ。



メディナの居住地区

7) 社会関係の基礎単位としてのアーイラ(拡大家族)

アーイラは、両親とその既婚の息子たちとその家族及び未婚の子女からなる父系の拡大家族が一つの理想型。男女の空間の隔離：男/女、外/内、公/私、聖/俗、名誉/恥

8) メディナの社会関係の特徴

デュルケームが単純な多分節社会と規定したように、マグリブ社会は、特に部族社会の特徴は、部族連合→部族→支部族(村)→氏族→系族→小系族→拡大家族というように一連の分節社会構造を持つ。都市の家族は、その町や王朝の形成期には、アサビーヤ(血縁に基づく連帯意識)を持った親族が集まって暮らしていることはあっても、次第に混住。隣近所の付き合いは濃かった。社会関係のほとんどすべての場(家庭と職場、宗教的施設等)がメディナの中にあって、人々の関係は錯綜し、社会関係の密度の濃い社会。



上の写真の右側の板の門の中の馬具職人(すでに逝去)の家と女主

9) メディナの内外とハダリ意識—社会階層と連帯意識の構造図

町の住民は、支配者を含めて皆、ハダリ(都市民)であり、バダウィ(田舎の人)とははっきり区別される(図2参照)。ハダリ意識を支えるものは、もちろんイスラームを核とする洗練された一つのライフ・スタイルである。宗教の義務を果たす良いムスリムでいること、アサビーヤの意識を

中心とする良い家族・親族関係や家族の名誉を重んじること、日常生活の洗練されたあり方(態度、物腰、言葉使い、衣服の洗練、食事のマナーなど)、人付き合いの良さや、貧しい人々に示す寛容、カリーム(人徳)などであった。それらは経済力に支えられ、政治力とも結びついた。

植民地以降のメディナの変化

1) 植民地型チュニスの中のメディナ

チュニジアは1881年以降にフランスの保護領となる。フランスの銀行家と企業家を中心となって鉄道建設、リン鉱石、鉄鉱石の採掘(ちなみにアルジェリアのカビリーの村人の海外への最初の出稼ぎはこのリン鉱石採掘場での労働だったという)優良な土地は取り上げられ、醸造用葡萄酒・オリーブ・小麦・柑橘類の大農場経営が行われた。

つまりチュニスはフランス経済の補完物としての発展、宗主国の利益と繁栄のための第一次産品輸出と安価な工業製品輸入のための中継都市となった。伝統的手工業や商業は決定的打撃を受け衰退、農村の荒廃と人口流出、都市への流入が起こった。

2) 町の空間規模の拡大と新しい階層分化

1881年当時、チュニスは約300ヘクタール、人口約12万人、20世紀初頭にかけて、海の門改めフランスの門から港を結ぶ大通り、フランス通りとジュール・フェレイ通りを中心に市松模様、ヨーロッパ人街が整備された。中心部には、フランス総督府、カテドラル、銀行、ホテル、リセ(中高等学校)を建設。1900-1940年、フランスヴィルを典型とする分譲住宅街が近郊に拡大。港近くには、シシリー人街、近郊のユダヤ人街やマルタ人街のような、ヨーロッパ人の住み分けもあった。植民政策は、チュニジア人の同化策を進める一方都市政策は隔離方式。

1921年には初めての人口センサスが行われたが、1930年代までは、ヨーロッパ人の流入に比べて、チュニジア人の人口増もまだ緩慢であり、ヨーロッパ人81,450人にたいして、チュニジア人112,105人で、チュニジア人もほとんどメディナと両ルパートにすんでいた。

新しい階層分化：ヨーロッパ人頂点、新興ブルジョワ層、賃金労働者、下層民(その多くは、農村から流入、1946年にチュニス最初のスラムもできた)。

その後、独立後のチュニスでは、人々は、フランス人などの出て行った後に移り住み、富裕層が、郊外に家を建てて移り住み、空いた家ダールに地方からの、移住者が、部屋借りをして、メディナの移住構造が進み、いわゆるウカラ化現象が進んだ。



チュニスの調査地の一部



ウカラ化された家に住む移住者。彼らは部屋借りをして、中庭で作業や煮炊きをする。

調査当時のメディナの社会関係の特徴

1. 住民の生活と社会関係の場の拡大とメディナのベットタウン化
2. 生活の場フォーマの崩壊
3. アーイラから小家族単位へ
4. 女性の地位の向上

何だか最後が簡単になってしまいましたが、どうぞ論文をお読み下さると有難いです。

宮治 国民の成熟度のことで、質問も頂きました。チュニジア革命が、なんとかこれまで、内戦状態に至らないですんでいる理由として、チュニス大の社会経済研究所長のエル・アナビ El-Annabi 氏からの革命直後の私信メールの中で、軍隊が冷静で中立的だったことと、民衆の成熟度が高いという事を言っておられたことをお話ししましたが、14世紀以降のチュニスのメディナの都市文化の高さ(これはメディナの調査の中で私も驚いたことでした)といわゆる、都市民ハダリの意識の高さを考えると、何しろ、アラブの社会



チュニスのブルギバ通りのイブン・ハルドゥーンの像
学者の祖といわれる、イブン・ハルドゥーンを排出したところですし。独立後の教育に国家が熱心だったことや、女性の社会参加の度合いが日本よりはるかに進んでいることを考えると成熟度が高いと思います。

チュニスに暮した日本人から、チュニジア人は、観光立国だから最初は大変歓迎されるが、個人的な付き合いで親しくなるのは難しいという話もききました。日本の京都人のようですね。どこか冷静な、醒めたところがある。それが良い方向に働いたのではとも思います。

質問者 C ご講演の中でお話されたベルベルとかアマジグといった呼称について、日本ではまだベルベルを使っているものが多いと思いますが、アマジグの方を使おうとかいった動きはあるのでしょうか。

宮治 民族呼称のことはさきほどもお話ししましたが、今のご質問で思っていたのは、帝国書院の顧問会というのがあって、その帝国書院は地理の教科書の7割のシェアを持つ出版社です。だからこれから出版するという教科書の前の段階で、なにか問題があったら言ってほしいという事で、私も参加していました。私は中東・アフリカとくに北アフリカですけど、ちょっと問題を見つけたら指摘する、そういうこと5年位させていただきましたが、病気で入院して辞めさせていただきました。その後7、8年前に帝国書院の方から電話かかってきて、読者からベルベルっていうのはおかしいんじゃないかって投書があったけど、どうお考えになりますかって言われたんですね。そのとき私はやっぱりアマジグにしたほうが良いと思うんですけど、でもなんか若い方は時期尚早と反対してる方もいるので、ちょっとここ1、2年は様子を見てはいかがですかって、そのときは答えたんですけど。例えばチュニジアはアマジグが全人口の1~2%でしょ。もともとは南のオア

シス地域にいますが(かなりの人口がチュニスにも移住していますが)、これはベルベルの模様の絨毯だとかって言って、むしろ観光の宣伝に使っているんですね。ところが、最近、南のオアシス地域を研究する鷹木恵子さんから、「先生、今、チュニアでもアマジグ運動すごいですよ」って。1~2%なのと思ったけど。それじゃあ、ますますやっぱり変えたほうがいいんじゃないかなって思っています。最近アルジェリアでも国語の一つにはなっていました、最近モロッコに次いでついに公用語にもなったそうですし。

フランス人やイギリス人が、ベルベルを使い続けてきたのは、ある意味自然な流れかもしれないですけど(最近では欧米でもアマジグを使う学者もいます)、ベルベルって言葉はまったく日本語じゃないですよ。日本語じゃないのになんでそれを使い続ける必要があるのかと思います。しかも本人たちが自らの呼称を変えているのに、なぜそれを日本人が使い続ける必要があるのかなということは今でも強く思っています。(ですから、今度帝国書院に電話をしようと思っています。まずは、ベルベル(アマジグ)人をアマジグ(ベルベル)人に、最近日本でもアマジグ人を使う方も少しずつ増えています。)

質問者 D 研究者を志す若い人たちに対して、今の時代、変化がありますけど、時代の変化を踏まえてなにか思うこととか、なにか伝えたいこととかあれば伺いたいと思います。

宮治 そうですね、私ね、研究者になれるかしらって、子供抱えて思って、ちょうど修論書いてたときにやっぱり悩んだのですね。赤ん坊抱えて研究者やっていけるかなって。そのときに、試験的に(その当時は3歳児以上でしたから)というので息子が1歳半で、世田谷区立の保育園に入れてもらえました(0歳児のときには、大学院の授業に出るので、5か月から、保育ママさんという制度があって、近所の知り合いの方に預かって頂きました。)でも午後4時になるとピタッと修論書くのをやめて息子を迎えに行き、乳母車を押して買い物して、ご飯作って。(夫はただ食べに帰ってくるだけで。15年間は毎日帰ってくればご飯ができていたという感じです。最初に結婚したとき、毎日ご飯を作ることを不思議だって思わなかった世代です。当たり前だと思っていました。)そうすると4時から寝かせるのが9時なんです。その5時間が修士論文の12月20日締め切りが近づく10月くらいになると惜しいと思うようになりました。ああ惜しい惜しいと思ったんですけど、その時に思ったのが、これももし修士論文書けなかったら、これは時間がないから書けないじゃなくて、能力がないから書けないのだと思ったんです。そうすると、能力がないから書けないって悔しいじゃない。そう思ったら気持ちが落ち着いて、修士論文を出せたんです。その年は4人修士論文を出したのですが、あとの3人は男の人。そのうちの一人は第4章を下書きで出して、先生に叱られて通りませんでした。当時は手書きで、必ず清書しなければなりません。私の修士論文は、説得力があるって評価して頂きました。それで、ああ研究者としてやっていけるかなって思うことができました。だからやっぱり能力がなくて書けないと思わないで頑張る。これからの若い方たちは、結婚しても家事育児を分担して、研究していく時代だと思えます。結婚しなくてもシェアハウスなどで、共同生活で、助け合うのもよいですし。

それから、もう一つ是非お伝えしたいのは、フランスの高等研究院に行っていた時にメルシエ先生から頂いたアドバイスです。

それは、各学期の終わりに先生のお宅に院生たちが順番で伺って、15分間1対1でお話しをするのです。その時に、私が自分では理想的にはもっとこういうフィールドワークをしてこういう研

究をしたいけど、子供もいるし、経済的な事情もあってなかなか思うような研究ができないとこぼしたんです。そうしたら、メルシエ先生が、「そんな自分の理想通りのフィールドワークや研究が簡単にできる人は滅多にいないでしょう。だから貴女は、まず貴女の理想では、どういう研究やフィールドワークがしたいのかを、明らかにして書いてごらん下さい。そうして、現在与えられた状況の中では、その理想の全体像の中のどの部分をやるのかという事を明らかにして下さい。そしてそれをやればよいのです。」とおっしゃいました。つまり、これは人類学に限らず何の学問でもそうだと思うのですが、まず、自分が何をやりたいかを明らかにする、つまり立論が大事で、その上で、今できることを考える。そして、少しずつ理想に近づけていく。それが学問だという事を教えていただきました。私は、子供二人を育て、家事もやりながら、常に与えられた条件の中で何ができるかを考えながら、研究を続けてきました。でも振り返れば、いろいろ自分ではどうしようもない出来事がたくさんあります(例えばお話ししたように、サバティカルを半年頂いた時に、ちょうど夫が難病に倒れ、海外調査ができないことは残念でしたが、でも一番これから自分の研究成果を纏めるといふ時期に病に倒れた夫も気の毒でした)。アルジェリアの調査も、アマジグの春事件で、調査許可が貰えなかったり、内戦が始まって10年間はとても調査に行ける状態ではなかったりもしましたし。中東のように戦火に巻き込まれたり、大災害にあったり。私が『イトコたちの共和国』を翻訳した、ジェルメヌ・ディヨンのように完成していた博士論文をドイツのゲシュタポに持ち去られ、「夜と霧」と呼ばれた有名な、入ったら出られないといわれる収容所に入れられながら一命をとりとめ(彼女の母親はそこで亡くなります)、その体験を *Ravensbrück* という本に纏めて賞をもらい、その後、若いころ調査をしたアルジェリアの独立戦争の時に、ミッテラン大統領に頼まれて、「アルジェの闘い」に出てくる、アルジェの闘士と会談したりして活躍した人類学者もいますし、本当に人生は、何が起るかわかりません。でも日々今できることをやって行くのが人間ですし、研究者の生き方だと思います。

私も歳をとりましたが、カビリーの村や、メディナの調査資料を何らかの形で纏めるといふライフワークをまだ諦めてはいません。この度は、こうやって皆さまの前でお話することが出来、自分のこれまでの研究を振り返る機会を与えて頂いたことは大変ありがたいことでした。イスラーム地域研究センターの先生方と院生・学生の皆さんに、心からお礼を申し上げます。有難うございました。

宮治美江子先生——業績——

1964年

- ・『マヤーグアテマラ・ホンジュラス・ユカタン』(アンリ・スティールラン著、増田義郎と共訳)、美術出版社、1964年9月、【翻訳書】

1975年

- ・「大カビリー地方(アルジェリア)の村落における対仏労働移動の実態とその影響」日本アフリカ学会第12回学術大会、於京都大学、1975年5月、【学会・研究会報告】
- ・「揺れ動くアルジェリアの農村社会—出稼ぎ村の実態調査報告」『中東経済研究所報』No. 4、16-22頁、1975年10月、【論文等】

1976年

- ・ *L'Emigration et le Changement Socio-Culturel d'un Village Kabyle (Algérie)*, *Studia Culturae Islamicae*,